

## 英語学を文法指導に生かす (2)

久保野 雅史

### 0. 言語学者と教師の往復書簡

前回の論考の最後に「教えるための嘘」の罪深さについて指摘しました。言語学の知見を英語教育に活かすことに関して、大津・末岡（2019: 9-10）は師弟間の往復書簡の形を借りて現状を分析しています。

#### <質問3（大津→末岡）>

個別言語の個別文の分析についてはけっこういろいろな本が出ていますが、その内容が小中高の先生にどれだけ伝わっているのか不安です。どの程度、伝わっているのでしょうかね。もしあまり伝わっていないのであれば、どうしたらよいのか、意見を聞かせてください。

#### <回答3（末岡→大津）>

英語の様々な文法事項を扱った本は無数の存在します。その中から学校文法（school grammar）にとって有益で、かつ総合的・体系的な本を選ぶとすれば、日本で出版されたものだけでも、江川（1991）、安井（1992）、中村（2009）、安藤（2005）、太田・梶田（編）（1985-1990）などが挙げられます。これらの本には、一生かけても学びきれないほどの情報量が含まれています。では、これらの情報が中高の英語教師にどれだけ伝わっているかと言えば、残念ながら「ほとんど伝わっていない」というのが現状だと思います。

なぜほとんど伝わっていないのかという理由に関しては、いろいろな側面から考えないといけません。最初に否定しておかなければいけないのは「教師たちが不勉強だから」という理由です。教師たちは大変な勉強家です。忙しい時間をやり繰りして英語の勉強

をしています。そうでなければ英語の授業ができないからです。教師たちが教科指導以外に膨大な時間を奪われているというのはもはや有名な事実ですが、教科指導の準備に限ってもやらなければならないことがたくさんあり、教師が文法を学ぶ時間はほとんどないというのが実情でしょう。

時間の問題以外にもさまざまな理由があるとは思いますが、意外に指摘されることが少ない単純な理由としては、あらためて文法を勉強する必要があるから、ということがあるのではないのでしょうか。つまり、文法に関してはかつて自分が中学生・高校生だったころに学んだ知識だけで、授業ができてしまうということです（自分が中学生・高校生だったころに学んだ知識だけで授業をするのは、本当は非常に問題があるのですが…）。

ここは、「中学生・高校生時代に学んだ知識を検証し再構成していくには何が必要か」という本稿の目的と軌を一にするものです。今回は、句動詞と文型に焦点を当てて、この問題に切り込んでいきたいと思います。

## 1. 句動詞 I : <他動詞+副詞>のパターン

口語表現では、次のように2語以上の句（フレーズ）でまとまった意味を表す動詞が頻繁に登場します。hand inのように<基本的な動詞+副詞／前置詞>という形で意味的にまとまった動詞のことを句動詞（phrasal verb）と呼ぶことがあります。英語学では、句動詞の構成要素となる副詞（in, out, on, off, up, down など）を「不変化詞（particle）」と呼ぶがありますが、本稿では学校文法の用語に従って「副詞」で通すことにします。

- (1) **Hand in** your assignment. (課題を提出しなさい。)
- (2) **Hand it in** by next Friday. (課題は、次の金曜までに提出しなさい。)

目的語が代名詞itの時には、hand in it (×) という語順は許されません。これは、どうしてなのでしょう？ 同じようなことが、lift up (…を持ち上げる) という場合にも起きます。動詞liftの目的語Janeと副詞upの順序に注目してください。

(3) **I lifted Jane up.** < lift + 目的語 + up > ← ○

(4) **I lifted up Jane.** < lift + up + 目的語 > ← ○

(3) (4)の表す意味はほぼ同じです。微妙な違いはありますが、これについては後で説明します。また、upは副詞なので動詞liftよりも強く発音することが普通です。

それでは、(3) (4)のJaneを代名詞のherに置き換えると、どうなるでしょうか？

(5) **I lifted her up.** < lift + 代名詞 + up > ← ○

(6) **I lifted up her.** < lift + up + 代名詞 > ← ×

(5)の< lift + 代名詞 + up >は、まったく問題ない表現ですが、(6)の< lift up + 代名詞 >は誤りです。(6)では、文末に代名詞herが来ているために「英語らしいリズム」が壊れてしまいます。英語では「文末にある単語を強く言う」という原則があります。また、強く言う単語（厳密に言えば音節）が連続することを避けます。< 弱 + 強 + 弱 + 強 + 弱 … >のように、強く発音する音節が交互に現れる「リズム」が、英語では好まれるからです。これが、(6)の語順を避ける理由だと考えられます。

## 2. 目的語の位置と意味

さてここで、話しを(3)と(4)の微妙な意味の違いに戻しましょう。違っているのは「伝えたいことの焦点が何か」ということです。(3) (4)はそれぞれ、(7) (8)の疑問文に対する応答としてふさわしい発話です。

(7) What did you do to Jane? (ジェーンに何をしたの?)

-- (3) **I lifted Jane up.** (持ち上げたんだよ。)

(8) Who did you lift up? (誰を持ち上げたの?)

-- (4) **I lifted up Jane.** (ジェーンをだよ。)

(7)では「何をしたのか」と質問しているので、(3)のようにlifted upが答えの中心となります。その一方で(8)は「誰を持ち上げたのか」と質問しているので、(4)のように

Janeが答えの中心となるのです。答えの中心は情報の焦点ですから、＜強く言う単語＞が来る場所、つまり「文末」に置いた方が、意図が相手に伝わりやすいのです。

また、次のように、結果に関する含意が異なって来る場合もあります。

(9) **Turn on the radio.**

(10) **Turn the radio on.**

(9)の場合は、後ろに**but it didn't work. It was broken.**を続けることが可能です。しかし、(10)の場合は不自然に響きます。どうしてなのでしょう？それは、(10)が＜S+V+O+C＞の構文と同様の語順になっているためだと考えられます。「ラジオのスイッチをひねった結果、電源が入った」という含みがでるために、「故障していてつかなかった」という内容と矛盾してしまうのでしょう。

### 3. 句動詞Ⅱ：＜他動詞＋前置詞＞のパターン

これまで、句動詞の目的語の位置について詳しく見てきました。句動詞の多くは、例として取り上げた**lift up**の他に次のような＜他動詞＋副詞＞のパターンです。

もう一つのパターンは、**look for**や**belong to**のように＜自動詞＋前置詞＞の場合です。＜自動詞＋前置詞＞の場合は、目的語の位置に変化はありません。目的語が名詞／代名詞のどちらであってもにかかわらず必ず最後に置く」という点が＜他動詞＋副詞＞と異なっています。

(11) **Look at the words on the board.** (黒板に書いた単語を見なさい。)

→ **Look at them** … ←○ / **Look them at** … ←×

しかし、同じ動詞**look**が＜自動詞＋副詞＞のパターンで使われることもあり、この場合は目的語の位置に注意が必要です。

(12) **Look up the words in your dictionary.** (その単語を辞書で調べなさい。)

→ **Look up them** … ←× / **Look them up** … ←○

句動詞を正しく使いこなそうとすると、この違いを理解して慣れることは不可避です。例えば *OXFORD Advanced Learner's Dictionary (OALD)* には次のような解説があります。

■ In order to use TRANSITIVE phrasal verbs correctly, you need to know where to put the object. With some phrasal verbs (often called SEPARABLE verbs) , the object can go either between the verb and the particle or after the particle

She **tore the letter up**. / She **tore up the letter**.

■ When the object is a pronoun (for example it standing for 'the letter') , it must always go between the verb and particle:

She read the letter and then **tore it up**.

■ In the dictionary, verbs that separable are written like this:

**tear sth**  $\longleftrightarrow$  **up**

1970年代の中学校教科書 *New Prince English Course* (開隆堂) には、次のような句動詞が登場していました。

- She **got a machine out** from behind the house.
- Each friend will **put on the mask**.
- I'm **looking it over** now.
- You can **pick up the people** on top of it.
- They asked him how to **carry it out**.
- The first postage stamp was **put out** in 1840.

以上は、一部に過ぎないのですが、その質と量の充実度には驚くばかりです。句動詞は口語的な表現なのですが、「話し言葉軽視」と思われがちな当時の教科書の方が、今よりも丁寧に取り上げられているようです。何だが、不思議な感じがしませんか？

いずれにせよ、他動詞タイプの句動詞については、どこかで整理した上で意識的な練習をする必要があるようです。

#### 4. 学習指導要領の用語・術語

改訂された学習指導要領が、2021年度に中学校で、2022年度には高等学校で実施されます。学習指導用量はほぼ10年ごとに改訂されてきましたが、ア、イのような問題点が指摘されています。

ア 基本用語の明確な定義がなく、曖昧な意味のまま記述が続いている。

イ 参考文献の引用がなく、用語や考えがどのような学術的背景を持ったものなのかが分からない。

そのために、指導要領を独力で研究しようとしても参考文献等に当たることができず、理解や解釈が恣意的になる恐れがあるのです。

そこで、学習指導要領で使われている用語の「定義」と「(学術的)背景」について、対象を限定して考えてみることにしましょう。

#### 5. 「文型」から「文構造」へ

前回(2008年告示)の学習指導要領から「文型」という用語が一掃されて「文構造」に置き換えられました。この変更について、中学校の解説(2008)では、

従来の学習指導要領で用いられていた「文型」に替えて「文構造」という用語を用いた。文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し、また、文の構造自体に目を向けることを意図してより広い意味としての「文構造」を用いたのである。

と説明しています。

そこで、この変更に切り口を限定して、指導要領の用語について細かく検討してみることしましょう。文部科学省の記述を整理してみると、「文構造」に変更することによって期待されるのは、

- ① 5文型の分類に終始する指導を是正すること。
- ② 文の構造自体に目を向けさせること。

であり、また、

- ③ 「文構造」は従来の「文型」よりも意味が広い。

と主張していることが分かります。

①は「いつも文を5つに分類させるような指導」ではダメだと言っているのでしょう。「文型」という用語を見るとすぐに「5文型」を想起してしまうので、それを避けることが狙いなのかも知れません。

それでは、②はどうでしょうか？文の「構造自体」とうのが具体的に何を指しているのか、解説には明示的な説明がありません。しかし、③によると、「文構造」は「文型」では表さない意味を含んだ、より広い概念だ、と解釈できます。ということは、②で目を向けさせたいのは、「文構造」と「文型」で重なっていない部分ということになるのでしょうか？

しかし、「文構造」の内容に関する記述は、次に引用するように従来の「文型」と全く変化していません。

文構造の記述には、文の構成要素を示すために主語、動詞、目的語、補語の用語を用いている。

- a [主語＋動詞]
- b [主語＋動詞＋補語]
- c [主語＋動詞＋目的語]
- d [主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語]
- e [主語＋動詞＋目的語＋補語]

a～eを数字の1～5に置換すれば、そのまま「5文型」となります。また、「5文型」での分類に馴染まないものとして挙げているものも従来通りです。

結局「文構造」という用語によって拡張された部分を見つけることはできませんでした。

解説の中には「文構造 > 文型」であることを詳しく説明したり、具体例を挙げたりした記述はありません。「文構造」という用語についても、明確な定義が示されているとはいえないようです。

## 6. 5文型「悪玉」論

「5文型なんて教えるから英語嫌いが増えるのだ」という意見を聞くことがあります。これは本当なのでしょうか。5文型の存在自体が、それほど悪いものなのでしょうか？確かに5文型には不備はあるでしょう。典型的なものとしては、文の要素 (element) として省略できない副詞語句 (adverbial) の扱いが挙げられます。

(13) I lived in Tsukuba.

(14) I put a box on the table.

下線部の副詞語句を省略すると、文として成立しないからです。このような不備はありませうが、主語 (Subject)、目的語 (Object)、補語 (Complement) といった文の要素の機能を理解する上では、非常によく出来たシステムだと言えます。

問題なのは5文型そのものではありません。その扱い方、つまり「指導法」にこそ問題があるのです。それなのに5文型を「悪玉」に仕立て上げて、その有用性までも全否定してしまうのは得策ではありません。また、信じ難いことですが、「5文型なんて日本人が考えたんでしょ？」と放言して憚らない程度の見識しか持たない大学教員が、学習指導要領の作成協力者の中にいるのが事実です。もちろん、5文型は「日本発祥」ではありません。以下、5文型の「学術的背景」について、整理してみることにしましょう。

## 7. 5文型の歴史

日本の学校文法で「だけ」、ローカルに使われていると誤解する人もいる5文型。これは、誰がいつ提唱したものなのでしょうか？時代は100年ほど前のイギリスに遡ります。



## 7.1. Onions, Charles Talbut

Onions (1873-1965) は *Oxford English Dictionary (OED)* の編者の一人で、彼が書いた *An Advanced English Syntax* (1904) の中に現在の 5 文型の原形が見られます。ただし、用語は「5 文型」ではなくて、*The Five Forms of the predicate* (述部の 5 形式) と呼ばれる動詞の分類でした。Onions は次のように述べています。

Sentences are classified according to the form of predicate, which may assume any of five principal forms. (下線は引用者による)

## 7.2. 細江 逸記

細江 (1884-1947) は大正～昭和初期に活躍した英語学者で、彼の著作を通して「5 文型」は日本で普及していきました。『英文法汎論』(1917) では、次のように書かれています。(表記は新字と現代仮名遣いに改めて引用)

用ひらるる動詞の種類によりて其の動詞以外になお何か他の語を伴はざれば文の述語として陳述を完うし得ざるものがある。今動詞全般につきこの点を着眼点としてこれを考査すれば英語の動詞は次の二大別五小類に別れる。

- I 自動詞 : A. 陳述完全自動詞
  - B. 陳述不完全自動詞
- II 他動詞 : C. 完全他動詞
  - D. 与格動詞
  - E. 作為動詞

動詞にこの五種の区別あるは即ち文の陳述の形式に五種の異なりたる種別を生ずる所以であって、また実に文の根本形式に五種の異なりたる差別を生ずる所以である。本書に於いては便宜上この各種の動詞を中心として陳述を完成する文を順次第一公式の文、第二公式の文、第三公式の文、第四公式の文、第五公式の文と名付ける。

動詞の分類に連動して文の分類に言及しています。細江の用語では「文型」ではなくて「公式」が使われています。因みに『英文法辞典』(1970) では「形式」という用語が使われています。

### 7.3. 山崎 貞

山崎 (1883-1930) は「小野圭・山貞」と呼ばれた大正～戦前期における受験英語のカリスマの一人です。彼のベストセラー『新自修英文典』(1921) から引用してみます。

先に動詞の種類を5つに分けたが、文の形式も動詞の種類にしたがって、だいたい次の5種に分けることができる。Five Sentence Patterns (5文型) という。

ようやく「文型」という用語が出て来ました。山貞の影響力もあって「文型」(sentence patterns) という用語が文法指導に定着し、現在に至っていることが分かります。

ところでsentence patternという表現は英語として一般的なものののでしょうか? 意外とそうではないのかも知れません。

### 7.4. Quirk, Randolph 他

ロンドン大学のQuirk (1920-2017) が中心となって書かれた20世紀を代表する記述文法の大著*A Comprehensive Grammar of the English Language* (1985) では、5文型の不備として指摘されていた箇所を修正するために、SVAとSVOAを加えた「7文型」を提唱しています。そして、その簡略版*A Student's Grammar of the English Language* (1990) には次のように書かれています。(下線は引用者による)

A simple sentence consists of a single independent clause, which may be one of seven types. The types differ according to whether one or more clause elements are obligatory present in addition to the S(Subject) and V(Verb). The V element in a simple sentence is always a finite verb phrase.

1. **SV** : The sun is shining.
2. **SVO** : That lecture bored me.
3. **SVC** : Your dinner seems ready.
4. **SVA** : My office is in the next building.
5. **SVOO** : I must sent my parents an anniversary card.
6. **SVOC** : Most students have found her reasonably helpful.

### 7. SVOA : You can put the dish on the table.

ここではclause type (節の類型) という用語が使われています。安藤 (2007) は、これを踏襲したのでしょうか。「文型」の意味でsentence type という用語を使っています。

高校生用の文法準教科書 (検定外) では、安井 (1995) が「7 文型」を採用しています。(「7 文型」への拡張については、織田稔が批判的な立場から意見を述べていますが、これについては、また別の機会に検討することにしたと考えています。) ここまで、「5 文型」の提唱と普及について歴史的に確認してみました。さて「文構造」という新たな呼称や「7 文型」が、この歴史に追加されることになっていくのでしょうか？英語教育史の研究課題として興味は尽きません。

## <参考文献>

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社
- 安藤貞雄 (2007) 『英語の文型 一文型がわかれば, 英語がわかる』 開拓社
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 (改訂三版)』 金子書房
- 細江逸記 (1917) 『英文法汎論』 泰文堂
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説<外国語編>』 文部科学省
- 中村捷 (2009) 『実例解説英文法』 開拓社
- Onions, C. T. (1904) *An Advanced English Syntax*, Routledge & Kegan Paul.
- 太田朗・梶田優 (編) (1985-1990) 『新英文法選書』 (全12巻) 大修館書店
- 大津由起夫・末岡敏明 (2019) 「認知科学者と英語教師のやりとり—『学問的知見を英語教育に活かす』ということについて—」
- (野村忠央 他 (編) (2019) 『学問的知見を英語教育に活かす—理論と実践』 金星堂)
- 大塚高信 (編) (1970) 『英文法辞典』 三省堂
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 山崎貞・毛利可信 (1971) 『新自修英文典<第五訂版>』 研究社
- 安井稔 (1992) 『英文法総覧 (改訂版)』 開拓社
- 安井稔 (1995) *A Shorter Guide to English Grammar*, 開拓社